

織豊期の茶会における和物の使用と原因について

——千利休と豊臣秀吉の茶会を中心に——

趙亜男^{*}

〔論文要旨〕

本稿は千利休と豊臣秀吉が催した茶会を中心に、和物茶道具の使用状況を考察し、唐物から和物へと推移する経緯の一端を分析しながらその原因を説明するものである。

第一部では、千利休の祖父千阿弥と唐物とのかかわりについて扱った。第二部では、利休茶会における禅僧墨跡の使用状況から利休の創意を看取し、さらに、その原因が茶道具の目利きである利休と弟子の織田有楽が偽物の墨跡を購入した経験があるとかかわりを持つている可能性が高いという考察を導出した。

第三部では、秀吉茶会における和物茶道具の使用状況を考察し、秀吉の茶の湯に対する発想の獨創性を示した。また、秀吉の時代におきた天正飢饉への飢饉対策と家臣の加藤清正の禁酒令の分析を通して、秀吉が主催した茶会では和物を使い始めるや、庶民にも参加してもらうことから、秀吉の茶の湯文化を庶民まで広く普及させたい狙いが読み取れ、その原因は天正時代に起きた飢饉と実行された禁酒令に繋がっているという結論をつけた。

キーワード…茶会 和物 禁酒令

^{*} ちょう・あなん 埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程退学

一 はじめに

織豊期における茶の湯の歴史に関する研究が進展しているなかで、茶会とその場で使用された茶道具の研究は多岐にわたって幅広くなされてきた。文化史的な視点から論じられたものは充実しており大きな注目を集めているほか、茶会と茶道具に関する資料を用いて織豊政権の政治への探索も進められてきた。

しかしながら、歴史学においては茶会での茶道具使用を中心とする研究が比較的少ない。とりわけ唐物から和物へと推移する経緯と原因に関する研究はあまりなされてこなかった。研究資料としてそれぞれ利用されている茶会記や書状、日記には関連記録があることに基つき、本稿は千利休と豊臣秀吉が催した茶会を中心に、それぞれにおける茶道具の使用状況を考察し、唐物から和物へと推移する経緯の一端を分析しながらその原因を解明する。

二 千阿弥と唐物のかかわり

これまで千利休に関する研究では、彼の祖父千阿弥がよく言及されている。そこで、この部分では千阿弥と唐物とのかかわりについて論述してみる。千家を紹介する資料の中に、千利休の祖父について紹介しているよく知られた『千家系譜』と『千利休由緒書』というものがある。この二つの資料によれば、千家の成立は千利休の祖父にまで遡ることがわかる。そのため、千利休の祖父から唐物とのかかわりを見てみる。『千家系譜』には、

里見太郎義俊二男、田中五郎末孫、生国城州、東山慈照院義政公同朋^一

とあり、また『千利休由緒書』には、

利休先祖之儀者代々足利公方家ニ而御座候由先祖ヨリ田中氏ニ

而御座候、就中、利休祖父ハ田中千阿弥と申候而東山公方慈照院義政公之同朋ニ而御座候^二

とある。

千利休の祖父の身分について、中村修也氏は「利休の祖父が足利義政の同朋衆であったという確たる史料はなく、むしろ創作された家伝と見るほうが無難である」^三という指摘をしている。

また、千阿弥に関して、臨濟宗相国寺鹿苑院のうちの蔭涼軒主たちが執筆した公式日記である『蔭涼軒日録』寛正六年（一四六五）六月二十日条と文正元年（一四六六）四月十一日条にも、次のような記事が収録されている。

自公方様御仏事三百貫文、被遣于普廣院、但千阿弥奉之、

一 高木文『茶聖利休居士記録』（一九〇四年）

二 同右『茶聖利休居士記録』

三 中村修也『源流茶話』注釈（二）（『文教大学教育学部紀要』三十八号（二〇〇四年）一四一頁。

御売物代被出之、但御絵軸并御打刀一腰也、買得之者、以代物可買之也

(寛正六年六月二十日条)

来廿六日於等持寺、営瑞泉寺殿百年忌御仏事、仍自公方為三千疋分、以御盆三枚自千阿弥出之、即命于等持寺、乞彼請取、蓋為使于千阿方也

(文正元年四月十一日条)

寛正六年(一四六五)の記述には、「公方様」は室町幕府第八代將軍足利義政のことである。義政の父足利義教は一四四一年七月十二日に崩御している。日記に記載されている六月二十日は義教の年忌である七月十二日の約一か月前に当たる。こうしてみるとこの記録は、義政が父の年忌に行う供養や法会を含む仏事の費用三百貫文を捻出するため、名物の絵軸と打刀を売ったことを記したものである。文正元年(一四六六)の資料には、「瑞泉寺殿」の記述があるが、これは瑞泉寺の中興開基とみられる足利基氏を指しており、基氏の没後百年に当たる一四六六年六月二日の日に義政が年忌法会を行うために、費用三千疋を捻出したい旨を千阿弥に依頼し、幕府が所有する三枚の名物盆を売らせるよう命じたことがわかる。

以上の二つの資料は、足利義政による名物売却の依頼の記述にしか過ぎないように見えるが、名物の絵軸と打刀が三百貫文に値し、三枚の盆が三千疋に値することが記載されていることで、義政期における唐物の名物の経済的価値の一端もうかがうことができるだろう。

さて、日記『蔭涼軒日録』の記事に記されている千阿弥と『千

家系譜』での千利休の祖父千阿弥と同一人物であるかということに触れていきたいと思う。一つの仮説であるが、千阿弥が千利休の祖父と同一人物であるならば、『蔭涼軒日録』の記載の内容に対する信憑性が高まるため、同朋衆として千利休の祖父が義政に仕えており、その命令に応じ、將軍所有の名物を売却し、仏事料捻出を行ったことがあるということは間違いないであろう。すると、千家と唐物の名物とのかかわりは少なくとも義政期にまで遡ることができるだろう。ただ、將軍の同朋衆として、名物を含む唐物を管理・売却する職務を与えられていたとしても、千利休の祖父が千家の所有物として簡単に唐物を手に入れることはできるとはいえないであろう。

三 利休茶会における墨跡掛物の変化と偽物事件

千利休の父である田中与兵衛と唐物について記述していきたいところだが、唐物に関する与兵衛の資料に、唐物以外の商いに関する資料しか現存していない。よって本論文では、父の与兵衛を飛ばし千利休と唐物とのかかわりを考察していく。

最初に利休が主催した天文(一五三二〜一五五五年)・永祿(一五五八〜一五七〇年)・天正時代(一五七三〜一五九三年)の茶会における唐物の利用の変遷について考察するため、各茶会記から考察した内容について論じていく。『天王寺屋会記』、『松屋会記』と『宗湛日記』に収録されている利休茶会をすべて抽出し、各茶会で使用された茶碗や掛物などの情報を記述していく。さらに茶会記について詳細な研究を行っている筒井紘一氏の「資料千利休の茶会抄録」^四を参考に、利休茶会は五十

^四 筒井紘一『利休の茶会』(角川学芸出版 二〇一五年)二二八〜二

回を超える^五が、そのうち掛物の記述があるのは十一回のみである。つまり、それ以外の約四十回の茶会では掛物が使われていないのである。掛物を利用した茶会記録を年代順に並べると次の通りである（文面の制限でここでは茶会の年月日・参会者・使われた掛物だけ記入した）。

| | | |
|-------------|------------|--------|
| 永祿五年五月廿七日期 | 達好閑 | 圓悟 |
| 永祿六年十二月一日朝 | 達巴 | 圓悟 |
| 永祿九年十一月廿八日期 | 宗及新五 | 圓悟 |
| 永祿十年十二月三日朝 | 宗二宗及新五 | 墨跡 |
| 永祿十二年三月五日朝 | 道叱道巴宗及 | 開山墨跡 |
| 永祿十三年二月三日朝 | 隆仙道叱宗及 | 墨跡大燈之 |
| 天正八年十二月九日期 | 宗及宗二 | 東陽德輝墨跡 |
| 天正十年十二月廿八日期 | 宗二及 | 古溪宗陳墨跡 |
| 天正十一年九月三日期 | 南宗和尚海会和尚宗及 | 虚堂墨跡 |
| 天正十五年一月十二日 | 宗湛宗伝 | 圓悟の文字 |
| 天正十八年九月十日晝 | 球首座宗湛 | 春甫文字 |

唐物の掛物は中国の禅僧が作者となつてゐるものを指すことから、各茶会記で使用された掛物が漢物か和物かを区別していくために、記録不明の「墨跡」を除き、利休茶会で使用された墨跡の作者についてみていく。中国の宋時代の禅僧圓悟克勤（一一〇六—一一三五）、大徳寺の開山の宗峰妙超（一二八三—

五七頁。
^五 具体的には五十六回の記録が見つかったが、これ以外又出ると思われる。

（一三三八）、中国の元時代の禅僧東陽德輝（生没不明）、大徳寺第百十八世住職古溪宗陳（一一五三—一一五九七）、中国の南宋時代の禅僧虚堂智愚（一一八五—一二六九）、室町時代の禅僧春浦宗熙（一四〇九—一四九六）五人の作による掛物が使われていることが読み取れる。開山というところの禅僧の名前が浮かぶが、先行研究^六によると、中国の禅僧の圓悟克勤と大徳寺の開山である宗峰妙超という二説が有力である。また、大燈は日本の禅僧宗峰妙超のことを指すことから、大燈墨跡は宗峰禅師によつて創作された墨跡であることがわかる。

さて、利休はなぜ四分の三の割合の茶会では掛物を使つていなかったのだろうか。この問いを考察するために、永祿・天正年間の唐物所有状況を記録した『唐物凡物』と『茶道具之記』を調査した。

室町時代後期の幕府勢力の衰弱につれて、足利將軍家に所有されていた唐物名物は段々散逸していった。そして、茶の湯文化の隆盛と普及に伴う茶人の増加により、墨跡を含む唐物の需要も増えていった。戦国時代の天下人織田信長と豊臣秀吉の茶頭を務め、堺の豪商でもあった利休であっても、唐物の所有数は、織田信長と豊臣秀吉に次ぎ、唐物を多く所有していた武將や大名や、利休と同様に茶頭を務めていた今井宗久と津田宗及とも比肩されるものではなかった。

利休が多くの茶会で掛物を使わず、日本禅僧の墨跡を使い始めた大きな原因の一つは彼が唐物掛物を多く所有していなかったことに起因するといえるだろう。時代をさらに下ると、

^六 中国の禅僧の圓悟克勤という説が通説であり、大徳寺の開山である宗峰妙超という説について、竹内順一氏が「四大茶会記をよむ（二六—）和物茶碗の使用」『孤峰』三十九卷（二〇一七年）三十三頁。

楽水居主人が寛文十二年（一六七二）に編集し刊行した『弁玉集』がある。この本について、筒井紘一氏は『茶書の系譜』で「この本を見る限りでは数寄者の興味は、数の上で制限のある唐物茶器を入手することの困難から、和物へ向いていたことを教えてくれる。」^七という指摘をしている。

前文で挙げた利休茶会について振り返ると、彼の墨跡使用の状況をもとに、十一回の茶会を三つの期間を分けていくことにする。それは、第一期を永禄五年から永禄十年（一五六二～一五六七年）、第二期を永禄十二年から永禄十三年（一五六九～一五七〇年）、第三期を天正八年から天正十八年（一五八〇～一五九〇年）までとする。開山について中国禅僧の圓悟克勤と日本禅僧の宗峰妙超という二説があることは前文で触れた通りである。どちらより確からしいかということについてここでは論述しないが、利休茶会における大徳寺開山宗峰妙超の墨跡の使用永禄十三年にまで遡ることがいえよう。私はまた、大燈墨跡はこれ以降の茶会では掛物を使っていない。またこの茶会から十年間後に行われた天正八年（一五八〇年）十二月九日朝の茶会からまた中国禅師の墨蹟を使うようになった。さらに当時存命中であった日本禅師の古溪宗陳による墨跡を使用するようになったことも注目すべきところである。

ここから、永禄十三年（一五七〇年）二月三日朝の茶会で日本禅僧の墨跡が使いはじめられたことについてみていきたい。そのため二年前に催された茶会の記録について看取することに。その茶会の参会者である津田宗及は『天王寺屋会記』で次のように記録している。

七 筒井紘一『茶書の系譜』（文一総合出版 一九七八年）一六九頁。

同霜月十二日昼、不時ニ、千宗易口切也、道巴 宗及
 炉ニ平釜 自在
 ケンサン 黒台ニ 手桶 バウノサキ
 此冬ハ宗易ヒツソクニ而朝会ハナシ、但、墨跡ナトヒキサ
 カレ候時之事也、^八

この茶会では墨跡が使われた記録がないため先に挙げないが、それにこそ問題があると傍線を施した部分から看取できる。意味としては、この冬（永禄十一年（一五六八））、千利休が逼塞したため朝会を行わなかったのであり、その原因は恐らく墨跡の事などより人間関係が悪くなったにあるだろうと捉えないかと思われる。それに、墨跡の事については、筒井紘一氏は『利休の茶会』には、「宗及の言う逼塞が密庵墨跡の買い損ないによる逼塞であることは間違いない」^九と指摘している。さて、「密庵墨跡の買い損ない」はどのような事を指しているであろう。

易近江国にて密庵墨跡を百二十貫ニ取て左海ニテ茶湯ニ出ず、客ハ北向道陳 松江隆専兩人ナリ。然処ニ文字ヲ不誉候を、易是を不思議トテ聞ハ、偽物かとて沙汰有之。易其儘焼すつるなり。後にも買そこなといはれ間敷為也。

『茶道四祖伝書』の「利休伝書」に書かれている右記の記録

八 『天王寺屋会記』のなかの「宗及茶湯日記他会記」永禄十一年十二月十二日条。

九 筒井紘一『利休の茶会』（角川学芸出版 二〇一五年）一一〇～一一一頁。

を見ると、次のようなことがわかる。宗易は近江国で密庵の墨跡を百二十貫で買い、堺に戻り自分の茶会で披露した。招かれた北向道陳と松江隆仙二人の客が墨跡について誉めないことに疑問に思い、利休はその理由を二人に訊ねたが、二人は墨跡が偽物だろうと思っていたということであった。そこで利休は、偽物をつかまされて損したといわれたくないと思い、そのまま焼き捨ててしまった。密庵とは中国南宋時代の禅僧密庵咸傑であるため、本来は密庵墨跡には密庵禅僧が書いた墨跡を指す。客として招かれた北向道陳と松江隆仙は同じく堺の茶人であるが、北向道陳は利休が茶の湯の道に入った際の最初の師とされる人物として知られており、松江隆仙は天王寺屋グループの一人である。また、『天王寺屋会記』に書かれている永禄十二年（一五六九）十二月十八日の朝会の記録「隆仙 宗易中なをり之振舞也」を踏まえると、利休と松江隆仙との間に論争が起きたことが考えられる。それは恐らく筒井紘一氏の研究から墨跡をめぐる論争に当たると推測できる。

当時の利休の様々な書状^{一〇}からわかるように、すでに茶器の目利きを依頼されていた千利休は、大金で買った密庵墨跡がで師とライバルに偽物だと永禄十一年（一五六八）に開かれた茶会の際に判断されたことについて、大恥をかいだと思われる。千利休が永禄十一年十二月十二日の茶会で朝会を省略して昼会のみ催したことや、永禄十三年（一五七〇）に開かれた茶会で大燈墨跡を利用したことは偶然なことではないと推測できる。なぜなら、密庵墨跡が偽物といわれたことで利休は、意図的に中国禅僧の墨跡を避けて日本禅僧の宗峰妙超の墨跡を使った可能性が十分あるからだと考えられる。

一〇 桑田忠親『利休の書簡』（河原書店 一九六一年）。

また、和物の偽物について、『茶道行言録』^二に同じような話が残されている。出典がわからないため、『茶道行言録』を参考に簡単に内容を紹介したい。

織田有楽は大徳寺の寺内から出た大燈禅師（宗峰妙超）の墨跡を買ったが、その真偽が問題になったため、京都所司代にこのことを訴え出た。判決は簡単につかず、京都所司代は当時の政治の中心である江戸に対処についてうかがった。それにより、大燈墨跡を本物と称した大徳寺の僧に対して罰を与えることになった。この記録についてとくに注目したいことは、織田有楽が買った大燈墨跡が偽物だったことが認められ織田有楽が大徳寺の僧から購入したことである。

まず偽物の墨跡を見る。この記録に現れた織田有楽（一五四七〜一六二二）とは、織田信長の弟の一人であり、千利休から茶道を学んだ利休十哲の一人でもある。彼は千利休との関係が深いことから、永禄十二年（一五六九）と永禄十三年（一五七〇）に千利休が大燈墨跡を使用したことと関連性をもっている可能性は少なからずあったと推測できるだろう。前述したように、大燈墨跡が使用された永禄十三年の茶会から十年を隔てた天正八年（一五八〇）十二月九日の朝の茶会まで、千利休は自身が主催した茶会では一度も墨跡を使用しなかったのではないのである。織田有楽が偽物の大燈墨跡を購入した年代について具体的な記録がないため、利休が使った墨跡と異なるものだったのかそれとも同じものだったのかということについて判明しない。しかし、確信できるのは千利休が偽物を買ったことで「逼塞」したことに比べて、織田有楽が偽物を買ったことに対する

二 西堀一三『茶道行言録』（河原書店 一九四二年）一六九〜一七一頁。

さばきの経過が江戸まで伝えられたことで、日本中に大きな影響を及ぼしたに違いないといえるであろう。それは、織田有楽が偽物のことを当時の都である京都の所司代にまで訴えた結果、このことに関わる大徳寺の僧が罰を与えられることになったからである。そこで、利休はこの事件の影響を受けて長い間墨跡を使っていなかったとも推測できるであろう。

また、偽物の墨跡について、『茶道百話』『真跡と偽物』には、「茶席で墨跡とか絵とか有って、種々趣を添へるのだが、大抵は内容より筆者の名前で済まされる。数限りない掛幅の事ゆえ、分らぬものが多いのもやむを得ない。名前だけとなると、能く通った名のほうが好い、偽物も床に上る理由である。」^{二二}とある。このことから、偽物墨跡が多く存在していたことがわかる。

つぎに大徳寺に注目する。これまで、茶会記から見る大徳寺と墨跡掛物の関係について多くの研究がなされてきた。その主な研究として筒井絃一氏と谷端昭夫氏の研究を挙げることができる。例えば、谷端氏は「茶会記の始まる天文二年から天正の末年までの間の茶会、約九百八十会にわが国禅僧の墨跡が現れるのは、わずかに三十会に過ぎず、分析には必ずしも十分な数とはいえない。しかしながら、この中大徳寺派以外の禅僧の墨跡が一本も見られないことを考慮すれば、茶の湯の世界における大徳寺の地位は確固たるものになっていた左証でもあった。」^{二三}と指摘している。しかし、唐物と和物の売買に関する資料が少ないため、大徳寺における唐物・和物の売買に関する

二三 近重物安『茶道百話』（晃文社 一九四二年）二二頁。
二三 谷端昭夫「禅僧と茶の湯―天正期の堺を中心に―」（『禅文化研究所紀要』二十六号 二〇〇二年）三四〇頁。

研究も少ない。岡本真氏の研究成果^{二四}をふまえると、大徳寺の海外貿易活動が少なかったことが資料が少ない一因となっていると思われる。そこで、前述した大徳寺の僧侶による偽物の墨跡の売買に関する記録は、大徳寺における和物茶道具の売買の証拠を示す資料として重視されるべきであろう。

利休茶会の三番目の転機では、利休が天正八年（一五八〇）十二月九日朝の茶会から新しい中国禅師の墨跡を使用しただけではなく、古溪宗陳という存命の日本禅師による墨跡を初めて使ったことが重要なことになる。公用か私用かは不明だが、その茶会の一年前に、千利休は奈良に滞在したことがある。その滞在中の事柄について、天正七年（一五七九）九月二十六の日付入りの利休の二通の書簡がある。そこには次のような記録が残されている。

先日者、不図参、御茶。難忘候。殊に宿へ御見舞賜候。又、調法様々難申尽候。尚、道六へ申候。恐々謹言。

抛筌斎

（天正七年）

宗易（亀判）

九月廿六日

弥左衛門尉殿

二四 岡本真『戦国期遣明船研究』（二〇一五年）二〇四頁参照。「大徳寺派禅僧自身の渡航にかかわるものが見られなく、養叟派下禅僧と遣明船のかかわりは、堺商人や五山禅僧など遣明船搭乗者を介した間接的なものであった。」

御宿所^{一五}

尚々、両度之及御茶、難忘候。

必々御出津之事、待申候。

今度は種々御懇志難申尽候。御唐物之儀、不残拝見。殊更驚目候。一々不得申、道六に委曲申置候。定而相届申間敷候。当冬御入津不図待申候。恐々謹言。

(天正七年)

九月廿六日

宗易(亀判)

ぬしや源三郎殿

机下^{一六}

桑田忠親氏の研究によると、この二通の書状は、千利休が奈良に滞在していた際に塗師松屋久政と鋳物師久治の宅にそれぞれ訪問し、茶をふるまってもらったことに対して、二人に出した札状であるという。ここで松屋久政に宛てたものに特に注目したい。札状の解釈について、桑田氏は「このたびは、いろいろと御丁寧におもてなしくだされ、お心づくしのほど、なんともお礼の申しようもありませぬ。それに、御唐物道具を残らず拝見させていただき、全く驚きいったしだいです。いちいち

^{一五} 桑田忠親『利休の書簡』(河原書店 一九六一年) 十八号 四十

頁。
^{一六} 同右 十九号 四十二頁。

申し上げられませぬゆえ、くわしくは道六に話しておきました。が、おそらく、十分というほどでもありませんまい。この冬は、ひよっこり堺へお出かけのほど、お待ち申しております。」^{一七}としている。この書状には様々なメッセージが含まれているが、最も興味深く思うことは、利休は唐物道具を見物して驚いたことと松屋久政を堺に招待したいということである。

茶事における利休と信長の関係に関する最初の記録は、「今井宗久茶湯書抜」の永禄十三年(一五七〇)四月二日の条にあるのだがこれは、『信長公記』の天正三年(一五七五)十二月二十八日京都妙光寺信長茶会の条に書かれている「茶道者宗易」から、利休が信長の茶頭となったことは少なくとも天正三年にまで遡ることがいえるのである。天正八年は、千利休が天下人になっていった織田信長に仕えて約五年目になるころである。利休が松屋久政の宅で唐物道具に驚き、久政を堺に招こうとしたことは自身の感謝の気持ちを表すとともに利休が所有していた名物を友人である久政に早く見せたいという気持ちがあったからではないかと推測できる。結局、久政は堺に行ったかどうかは不明であるが、豊臣秀吉が天正十五年に主催した北野大茶会に、南都三十六人衆の一人として久治や道六とともに、参席したことがあることがわかっている。それらのことから、天正八年の茶会で利休がそれまでは使ったことのない墨跡を掛けたことを、天正七年(一五七九)の久政茶会で久政から丁寧にもてなしてもらった利休の唐物道具に対する複雑な気持ちから生じた行動に当たると考えられる。

天正八年以降の利休茶会における掛物の使用状況を見てみ

^{一七} 桑田忠親『利休の書簡』(河原書店 一九六一年) 十九号 四十三頁。

ると、唐物墨跡と和物墨跡を混用している傾向がある。すでに晩年に入っていた千利休が墨跡を必ずしも無意識のまま利用したとは考えにくい、その真の理由は何であつたかは不明である。竹内順一氏は四大茶会記における和物茶碗の使用記録について、和物茶碗が使用された最初の記録は『天王寺屋会記』の天文十八年（一五四九）十二月十六日の下間駿河茶会の条をはじめ、和物茶碗の使用に関する合計九箇所の記録を挙げている^{一八}。その記録には、利休茶会は入れられていないが、『宗湛日記』で記録された天正十八年（一五九〇）の利休茶会で二回記されている黒茶碗も含まれる。松屋久政茶会記天正十四年（一五八六）十月十三日の中坊源五茶会の条には、「宗易形ノ茶ワン」の記録があることから、利休の好んだ茶碗形態とされている同茶碗の形態について、天正十四年（一五八六）の記録に書かれている。従来、黒茶碗の使用について意見が分かれているものの、その茶会まで天目や高麗茶碗を使ってきたことがわかる。利休の茶会歴を参考すると、この変化は大きなものであるといえよう。また、墨跡掛物の使用歴も合わせ、利休の茶会を概観すれば、利休の唐物道具の使用の傾向は最後まで貫かれていくように見えるが、生存中の古溪宗陳禅師の墨跡をかけたり黒茶碗を使っていたことも、利休独自の茶会に対する創意の一表現だと理解できるであろう。この利休の茶会での使用した道具に関する大きな変化を促した原因についてここでは明言できないが、少なくとも唐物道具の不足と偽物事件による逼塞とかかわりを持っているのではないかと考えられるであろう。

^{一八} 竹内順一「四大茶会記をよむ（一六一）和物茶碗の使用」『孤峰』三十九卷（二〇一七年）三十三頁。

四 秀吉の晩期茶会と飢饉

前節では利休茶会での墨跡掛物使用の変化について見てきた。そこで墨跡をめぐる利休の経験と唐物を取りまく当時の状況に大きく左右されていた可能性が高いという考察を導出した。然るに、前述にも言及しているように茶会で利用する品が唐物から和物へと推移していった傾向は利休茶会にのみ存在する独特なものではない。秀吉の茶会でもその傾向があり、その傾向を主導していたのは天下人の豊臣秀吉であり、それを示す資料には『大友史料』がある。『大友史料』「大友家文書録六」（四二〇号）天正十六年（一五八八）三月の大友義統接待の条には、次のような記録がある。

同五日に、関白様へ御茶之湯、御座敷ハ四畳半、床有、床に紹鴎所持の朝山と申絵センメンかけられ候、棚の上にハ初花肩衝、天目台、是も紹鴎秘蔵の両種也、七台也、棚之下にハ、釜ハ瓜釜、誠にうりのなり也、水指ハ芋かしら、是も紹鴎所持、柄杓さし土の物、薬院進上之由候、水こほしハ備前はうのさき、御茶ハ、関白様御自身被遊候由、承及候、
薄茶ハ、二畳敷、いろりにせめひもの釜、自在にてつらせられ候、天下一の井戸茶碗、水指ハつるへ、蓋置ハ竹の引切、水こほしハめんつう也、其許にてハ、宗易の作に候竹之蓋置、又めんつう、つるへ、今焼茶碗、皆々すたり候由申候、聊も誠にてハなく候、既関白様御沙汰候間、可有御推量候

これは、大友義統に付き従い、上洛した浦上道冊が国元の若林道閑に送った書状である。同書状に記されている三月五日に行われた茶会では二回の茶会の様子が記されている。茶室と茶道具の使用の記録から、この二回の茶会は大名茶湯とわび茶が行われたことがわかる。織田信長の後継者である秀吉は、大名茶湯を好んでいた信長の「御茶湯御政道」という政策を踏襲しながらも、政治的な場面においては大名茶湯とわび茶という二つの茶会形式を併用していたことがうかがえる。

竹本千鶴氏によると、天正十三年に、秀吉はすでにこの頃和物収集を始めていたことが読み取れる。^{一九}天正十三年という、その年の三月八日に、秀吉が京都大徳寺において大規模な茶の湯会を開催したことが注目すべきである。この茶会では和物の使用に関する記録がなくて、秀吉の和物収集について明確出来ない。とはいえ、秀吉の茶の湯に対する新しい発想がこの時期の茶会に既に現れてきたようである。『兼見卿記』にある「茶湯之衆百五十人餘在之由申畢」からわかるように、百五十余りの茶人が参会したという。参会者の席入りについては『宇野主水日記』には

一番ニ紫野和尚達ニミセ申サル、二番武衛ナドノヤウナル
可然牢人衆ニミセレル、三番堺ノヨキ道具持衆、其外次第
く有之云々

とある。従来の少人数の茶会に比べて、大徳寺大茶会で幅広い階層の人を多く招待することから、茶の湯の影響を拡大したい

^{一九} 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（思文閣出版 二〇〇六年）四〇七頁。

秀吉の意図がわかる。

大徳寺大茶会に次いで、茶の湯の歴史において秀吉は空前絶後の大茶会を開催したこともある。それは天正十五年（一五八七）十月一日から十日までの間に京都北野天満宮で行われた北野大茶湯のことである。現存する資料の中では最も筆写年代が古いといわれている『北野大茶の湯』には、次のような記録がある。

一 北野の森におひて、十月朔日より十日の間に、天気次第、大茶湯御沙汰なさる々に付、御名物共不残そろへなされ、執心之者ニ可被拝見ために被成御催候事、

一 茶湯於執心者、又若党・町人・百姓以下ニよらす一釜、一つるへ一のみ物、茶こかしにても不苦候条、ひつさけ来、仕かくへき事

名物などを残らず取り揃え、茶の湯に興味を持つている来場者にそれらをみせることが書かれている。また、若侍や町人・百姓の身分を問わず、茶の湯に深い興味を持つているあらゆる人々がお茶と道具を用意さえできれば参加できるということを示す二条である。茶道具の使用に関する記述はないが、竹本千鶴氏がまとめた「秀吉蒐集の名物」^{二〇}によると、前述した浦上道冊の書状に書かれている竹の蓋置というわび茶道具がその一年前に行われた北野大茶湯に使用され始めたことから、秀吉は北野大茶湯の準備のために意図的に和物を集め始めた可能性があることが考えられる。このように、この二つ条文

^{二〇} 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（思文閣出版 二〇〇六年）一九三～一九三〇頁。

だけを見ても、北野大茶湯の規模の大きさと秀吉の茶の湯に対する発想の独創性がわかるだろう。また、和物の使用はもちろん、参加資格についての制限を設けないという発想からは、支配層にのみ利用されてきた茶の湯の権利を庶民にも与えようとする秀吉の庶民への配慮も読み取れるだろう。また逆にこの条文を出すことで秀吉が支配者たることを民衆に知らしめるための政治手段として活用したとも見ることができると。

さて、なぜ秀吉は北野大茶湯を開き、和物の茶道具も使用し、庶民にも参加させようとしたのか。当時の社会背景を考慮すると、天正年間に発生した飢饉に対する民衆への配慮としても見ることができるとであろう。

天正十三年（一五八五）に、京都の加茂川・桂川などで堤防工事を行い、貧乏人やにわか乞食を堤防工事の人夫として雇い救済するなどを通して、天下人である秀吉は飢饉の対策を実施した。これについて、『落穂集』には次のように述べられている。

天正年中の事に候哉五畿内大に不作し米穀の直段高値に成候故
軽きものは飢に及び新乞食も余多出来候へ共米穀払底の時節故
人の救ひ施も無之に付道路に伏し倒れて相果候者限りも無之を
豊臣秀吉公聞玉ひて殊の外貴勞に致され可茂川桂川等の堤普請
を申付土砂を持運び候ほどの者に鳥目（かね）をあたへ被申候て

飢饉の難を遁れ候となり

そのころ、大名次第でも禁酒令が出されたことがあるのだが、飢饉による食糧不足と米の高値の影響だろう。それにならい、天正十三年（一五八五）の茶会で秀吉と対面したことがある土佐の長宗我部元親は土佐で禁酒令を出したことがある。また、秀吉の家臣加藤清正が書いた豊太閣の大阪城中壁書御追加掟によると、

酒は根器に随ふ。但大酒御禁制之事。

右條々違犯するに於ては、嚴科に處せらる可き者也。

文祿四年八月三日

と多人数による大酒飲みを禁じる命令を下していることがわかる。

先に述べてきたように、飢饉と禁酒令を踏まえると、秀吉が北野大茶湯を開いた目的は通説にある権力の誇示が目的であったことはもちろんであるが、秀吉の茶の湯文化を庶民に広く普及させたいという狙いが現れたものであったと考えられる。

江戸時代に入ると、様々な自然災害や天候気象などの影響により、飢饉がたびたび起きている。とりわけ享保・天明・天保年間に起きた三大飢饉の被害は甚だ大きかった。そのためこの時期には、米や麦等主食が不足し、地域によっては嗜好品であったお茶も救荒食の一種として食用されていた。

出雲松江藩（島根県松江市）の第十代の藩主の松平不昧（一七五一年～一八一八年）は、江戸後期に不味流という茶道の新しい流派を創設した人物として有名である。天明期に大飢饉が

発生した際、不味は食いのばし策を取ってぼてぼて茶を推奨したため、ぼてぼて茶が出雲という地方で急に普及したのである。支配者層で流行っている茶の湯とは違う特徴を持っているが、飢饉の対策に活用されることより被支配者層では大きな役割を果たしたということが無難であろう。

五 おわりに

以上、千利休と豊臣秀吉が主催した茶会とその場での茶道具の使用状況を考察してきた。

千利休を考察する前、彼の祖父千阿弥に関連する記録を挙げ、千阿弥が足利義政の同朋衆であったことを前提として、義政が所有している唐物の名物の売却に関わっていたことがあることを述べた。

それから、四大茶会記を中心に千利休が主催した五十回を超える茶会から、墨跡掛物が使われた十一回の茶会に関する記述を抽出し、中国禅僧と日本禅僧が書いた墨跡の使用状況をもとに千利休の創意を看取してみた。また、茶会記や利休の書状などの史料に記されている関連記録を分析した。その結果として、利休が主宰した茶会において日本禅僧の墨跡を使用したかどうかの原因は、茶道具の目利きとして知られている彼が偽物の密庵墨跡を購入したことで大恥をかいしたことと彼のもとに茶の湯を学んでいる織田有楽が偽物の大燈墨跡を買ったことがあるとかかわりを持っている可能性が高いという考察を導出した。

最後に、大友家文書や『北野大茶の湯』などの史料をもとに豊臣秀吉が天下人になった以降主催した茶会を取り上げ、秀吉

茶会での和物茶道具の使用状況を考察した。天正十三年（一五八五）の大徳寺大茶会、天正十五年（一五八七）の北野大茶湯、天正十六年（一五八八）の茶会それぞれについて分析した結果、天正十三年に秀吉のなかでは茶の湯文化を拡大しようとした意図が既にあつたことがわかった。また、天正十五年の北野大茶湯において、秀吉は和物茶道具を使用しはじめただけでなく、庶民にも参加してもらいたいという秀吉の茶の湯に対する発想の獨創性を示した。また、天正十三年に秀吉が京都の飢饉に對して実施した対策や、家臣の加藤清正が文禄四年に禁酒令を下したことに關する記録を紹介分析した。秀吉が主催した茶会では和物を使い始めるや、庶民にも参加してもらうことから秀吉の茶の湯文化を庶民まで広く普及させたい狙いが読み取れ、それは天正時代に起きた飢饉と実行された禁酒令に繋がっているという結論をつけた。

〔文献〕

- 一、中村修也『源流茶話』注釈（二）（『文教大学教育学部紀要』三十八号二〇〇四年）
- 二、筒井絃一『利休の茶会』（角川学芸出版 二〇一五年）
- 三、筒井絃一『茶書の系譜』（文一総合出版 一九七八年）
- 四、桑田忠親『利休の書簡』（河原書店 一九六一年）
- 五、西堀一三『茶道行言録』（河原書店 一九四二年）
- 六、近重物安『茶道百話』（見文社 一九四二年）
- 七、谷端昭夫『禅僧と茶の湯―天正期の堺を中心に―』（『禅文化研究所紀要』二十六号 二〇〇二年）

- 八、岡本真『戦国期遣明船研究』（二〇一五年）
- 九、竹内順一「四大茶会記をよむ（二六二）和物茶碗の使用」
『孤峰』三十九卷 二〇一七年
- 十、竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（思文閣出版 二〇〇六年）

织丰时期茶会中和物的使用和其原因 ——以千利休和丰臣秀吉举办的茶会为中心——

赵 亚男

本论文旨在以千利休和丰臣秀吉举办的茶会为中心，通过对其和物茶具的使用情况的考察从而探究茶会中唐物到和物使用的转变和其中的原因。

第一部分考察了千利休的祖父千阿弥与唐物的关系。

第二部分先是通过千利休的茶会中禅僧墨宝的使用情况的考察分析了利休在茶会上的创意体现，之后考察得出其墨宝的更替与利休本人及其弟子都曾购买过墨宝贗品的经历不无关系。

第三部分通过对秀吉茶会中和物的使用情况的调查，提示出秀吉在茶会上展现的创新意识。此外，通过秀吉颁布的饥荒对策和加藤清正推出的禁酒令的分析，从秀吉在茶会中开始使用和物以及允许百姓也可以参加茶会中，除了可以窥测出秀吉打算将茶汤文化在民间普及开来的意图，也考察得出其中的缘由与天正时期的饥荒和颁布的禁酒令息息相关。

关键词：茶会 和物 禁酒令